

群馬県山岳連盟

〒371-8570 前橋市大手町1-1-1

群馬県庁観光物産課内

TEL 027-223-1111 内線3151

編集発行人

群馬岳連編集部 羽野順一

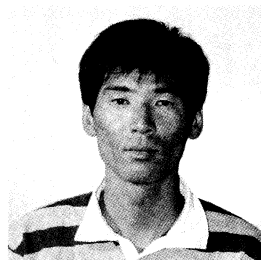
印刷所 朝日印刷工業(株)

山岳ぐんま

カラコルム・ハットトリック

群馬県カラコルム登山隊一九九七

登山隊長 名塚 秀二



冬期サガルマータ南西壁登山を終え、次のヒマラヤ登山の立案にあたって、群馬岳連が今まで行ってきた流れから言つて、「八〇〇〇m峰、バリエーションルート、冬期」を目標に山を決める事とし、

八四年のアンナプルナー南壁を皮切りとした過去四回の冬期遠征を踏まえて、冬期登山を行うなら、カレンダーウィンターと言われている十二月一日からの登山活動ではなく、厳冬期に入る一月一日から登山活動を開始して頂上へ立つことを頭に入れ、マナスル西壁、マカルー北西壁、ダウラギリ南壁を候補として挙げ、資料を集めた

のだが、マナスルは、八七年に北西壁から二月初旬に登られており、マカルーとダウラギリにいたつては、今の群馬の力では、とても立ち向かう事が出来ない。というのも、サガルマータ南西壁の時に、突然のネパール政府発表の人数制限で七人のメンバーしか参

加することが出来なくなつてしまつた。

そもそも、七二年のダウラギリIV峰の遠征から行つてきた、目標の山を陥すに当たり、経験者はもちろんであるが、常にヒマラヤ初見参をメンバーに入れ、次を見据えた登山隊を組織してきた。

しかも、九一〜九二年に一度失敗しているだけに、九三〜九四年のサガルマータの失敗は許されず、必然、経験もあり、ルート工作ができるメンバーをそろえざるを得なくなつてしまい、新人を入れる余地がなかったのだ。

そんな時に、スポーツニッポン新聞東京本社から、創立五〇周年事業の一環として、群馬県山岳連盟でヒマラヤ登山をやってみませんか、星野会長へ話がきた。願つてもない話で、さつそく山の選定と計画を推し進めた。

私としては、どうしても冬期にこだわりたいので、海外登山研究

会の佐藤と話し合い、冬のK2をやるうということにし、星野会長の確認を取りに行つたのだが、冬のK2ともなれば、ある程度の事故や失敗も覚悟しなければいけないこと、今回のスポーツニッパからの申し入れは五〇周年という記念事業ということもあつて、事故も無く、新聞に発表できるような登山であることが言われ、再度話し合い、

そうであれば、今回の遠征は冬にこだわる事なく、若手ヒマラヤニストの養成を目的に、全員が八〇〇〇mの頂に立ち、ヒマラヤの楽しさを体験し得る山、そして、一つの山だけを目指して登っているのでは、天候などの影響で、新人が頂を踏めないこともあるので、

パキスタンのカラコルムに聳え立つ、ガツシャールブルムI峰(GI)、ガツシャールブルムII峰(GII)、ブロード・ピーク(B・ピーク)を選び、パキスタン政府より、八〇〇〇m峰、一シーズン、一人、二

山の特別許可を取得し、一人の人間が年間を通して三つの八〇〇〇m峰に登るハット・トリックにあやかり、登山隊として一シーズンで三つの山を登つてしまうもくろみで、隊を三つに分け、A隊はGIとGII、B隊はGIとB・ピーク、C隊はGIIとB・ピークとし、仮に、いずれかの隊が二つの内の一つを逃したとしても、他の一隊がフォローする体制をとつて、カラコルム・ハット・トリックをスタートさせた。

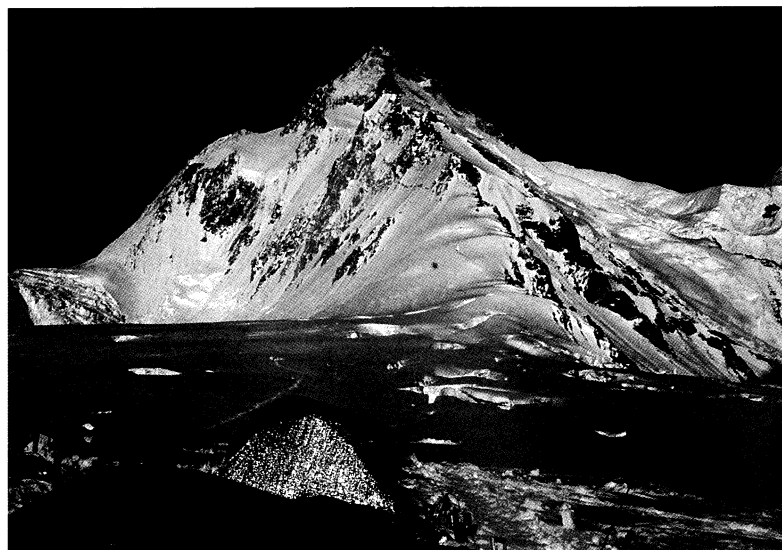
隊員は星野光総隊長他二〇名、ヒマラヤ初見参は七名、登山隊を三つに分けるので、一つの隊が約七名、その中に新人が二〜三名含まれているので、決して楽観できる隊員構成ではない。

それを補うように、A隊には、今日の群馬のヒマラヤ登山を築き上げ、国内でも有数の戦略家と言われる宮崎勉に加わってもらい、B隊には、その宮崎から、戦略全てを引き継いだ佐藤を隊長とし、補佐として、信州大学で技術を磨き、旧姓木村文江と結婚した後、

群馬に移り住んだ吉田秀樹を入れ、C隊は今後の群馬ヒマラヤ登山を引っ張っていく後藤を頭に、九一年のサガルマータ南西壁の時から参加し、今では、日本登山会の至宝とまでいわれる尾形好雄に補佐をお願いした。尾形は、スポーツニッパの特派員でもある。その他に、日

本ヒマラヤ協会から今後、日本のヒマラヤ登山を引っ張っていく、岩崎洋と、野沢井歩に参加してもらい補強を行った。ゴールデンウィーク中に全ての梱包と発送を済ませ、今までヒマラヤ登山がネパールが主だったの、カトマンズにデポしてある、登攀具、幕営具を回収しパキスタンへ送る。カトマンズ先発を五月十八日に出し、パキスタン先発を二十三日に、本隊を三十日に、星野総隊長は、登山隊がパキスタンのイスラマバードでの準備が全て整い、カラコルムの登山基地の街スカルドに出発する頃を見計らって、イスラマバードに入ってもらった。

しかし星野総隊長は、私達もそうであるが、入って間もない頃は食べ物と風土が合わずに必ずといってよい下痢に見舞われるが、総隊長も、スカルドに移動の朝方、下痢に襲われ、キヤラバンに参加する事なく全てを登山隊に託して助け出し難を逃れた。



ガッシャーブルムⅠ峰

しかしワイヤーの渡しでは一回に一人しか渡すことが出来ず、時間が経つばかりで、もう一本ワイヤーを張ってもらい、それでも遅々として進まないの、登山隊のロープで荷物を別送りにしたのだが、朝の八時頃から渡り出したにもかかわらず、夜の九時頃までやつたが全てを渡し終えず、その日の作業を終えた。

十二日パイユでは、ポーターの荷物の入れ替え、隊員は高度順応で裏山へ出かけたが、上は切り立った壁になっており高度順応訓練とまではいかなかった。

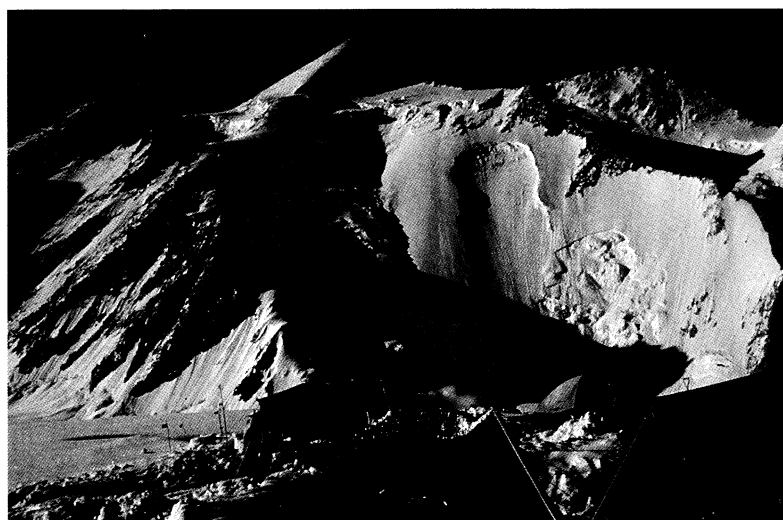
これより先、バルトロ氷河上を行くのだが、ウルドカスが唯一緑のある所で、ここで高度順応ができるのではと聞いてきていたが、約四〇〇〇mまでの高度しか獲得することが出来ず、結局、高度順応は各々のBCに入るキヤラバンのルート上で行うしかなく、初めての参加者には苦しかったようで、進むにつれ不調を言ってくる隊員が増えてきたが、ここは踏ん張って進んでもらうしかない。

十六日にコンコルディア。この日、先にB・ピークに取り付いている静岡市山岳連盟隊と連絡を取ろうと、トランシーバーの周波数を合わせると、突然、遭難の報が入ってきた。C3へのルート作業を終え、C2へ戻る途中で雪崩に巻き込まれたとの事、一人は自力

で脱出したが二人が行方不明との事。すぐにでも現場に行つて救助活動を支援したいのだが、いかにせん、私達全員が、高度順応ができていない。

翌日、私達の高度順応を兼ねB・ピークBCへ向かい、現場での手伝いは出来ないが、何かできる事があればとテントへ訪れたが、依然、行方不明で何も出来ず、後は、これから登山活動を開始するB隊に、できる限りの手伝いをするように指示してコンコルディアへ引き返す。

行方不明の二人は、十八日にK



ガッシャーブルムⅡ峰

2へ来ている日本山岳会東海支部登山隊が加わつて捜索活動を行い、BCよりC1間で遺体が発見された。A隊、C隊は十九日にガッシャーブルムBCへ到着。GI、GIIにはすでに数隊が入山していたが、まだCIまでしか建設できていない、南ガッシャーブルム氷河のアイスフォール、上部プラトール出口のクレバス帯のルート確保も出ていない状態で、改めてルートを作り準備し直した。

私達が登山を開始してからも、続々と各国の登山隊が到着し、登山活動を開始しているが、パキス

タン観光省の年間一山六隊の規制はどこにいつてしまったのか、連絡官に確認すると、今年は建国五〇周年の年なので、今年の三月までに申請を出した隊には全て許可を出しているとの事。ネパールの人数制限が一年でなし崩しになったが、パキスタンも同じになつてしまふのでは。

二十二日から登山活動を開始した当初は天候も安定し、ルートも延び

たが、二十七日より悪天となりB Cへ引き上げた。七月一日より再開したが、その後は晴天続きで、登頂まで、四日と十日の二日間だけが崩れただけであつた。過去の天候の周期はこうも続かず、三、四日晴れて、二、三日崩れるというパターンが多く、登頂日が、七月の下旬もしくは八月にずれ込む事もあつたようだ。

A隊、C隊のC1(五九〇〇m)は同じ場所、ここから、A隊はガツシヤールブルムー峰へ行き、C隊はGII南西稜へと分かれていく。

A隊は二日にC2(六四〇〇m)を建設。翌三日からG1の核心部であるジャパニーズ・クロワールへのルート工作を開始。晴天続きもあつてか、地球温暖化の影響も出てきているのであろう、岩が露出している所が多く、残置ロープが二、三mも上にある。星野が全てのルート工作を行い、二日間C3地点に到達。本来であれば、一度下に降りて休養してから後アタックとなるのだが、今後の天候が読めないこともあつて、休養なしで、六日にC3(七一〇〇m)に建設し、そのまま一気にアタックをする。

七日、名塚、江塚、星野、品川が三時半に出発。頂上直下の斜面は見た目より傾斜が強く、四本のロープをセツトして、十四時二十

六分に頂上に立つ。下山は、私の高度順応が完全でなかった事もあつて安全を計り、全てを星野頼りのスタカットで下降したので、C3へ帰幕したのは二十時近くになっていた。一日おいて二次の宮崎が

二名のシエルパと共に頂上に立ち、馬場、岩崎

栄は、高度順応の遅れもあつて、G1はあきらめてもらい、GIIに力を注いでもらう事にした。

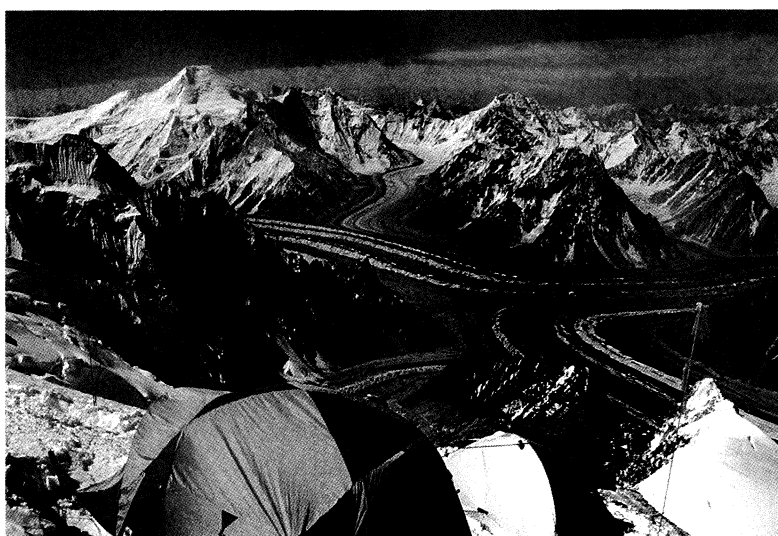
GIIに向かつてたC隊は、不調者が続出し、ルート工作ができる隊員は、後藤と尾形しかないなくなつてしまつたが、それでも二人は四日にC2(五八〇〇m)を建設し、七日にC3(七四〇〇m)を建設、C隊も一気にアタックに向かい、八日、三時五十分

にC3を出発し、十一時三十二分にはシエルパ一名と頂上に立つた。

C隊で順応が遅れていた綿貫、田島は、A隊と共に十四日頂上に立つた。田島は、二十歳五ヶ月の8000m峰登頂の国内最年少記

録となる。

B隊は静岡隊のルートを使つて、六月二十一日にC1(五四五〇m)を建設、二十三日にC2(六二〇〇m)を建設し、さらに上部のルート工作を行おうとしたが、天候



コンコルディア

五日、登山を再開し、八日にC3(六九〇〇m)、九日にはC4(七四〇〇m)を建設し、十日に第一次アタックを出したが、出発の時から天候は崩れており、コルへ出た所あたりから吹雪となり撤退、BCまで引き返した。

十四日、今度はメンバーを入れ替えて、随時キャンプを経由して、十五日に、吉田、吉田(文)、福本がC4へ入り、佐藤、梁瀬、岩崎(洋)もC2から一気にC4入りした。翌十六日、順応が遅れている中島を残し、シエルパ二人を加えた八人でアタック開始。この日は第一次のアタックとは違い今度は風が強い。先行している佐藤が中央峰に到着した頃が最も強く、遅れている他の隊員を待ちながら、一番迷つた時である。一度立ち止まると、気持ちはどうしても、下へ行くこう下山しようとなつてしまいがちになる。しかし、幸いにも、風は徐々にではあるが弱まつてきていた。相変わらずの強風ではあつたが、気持ちを切り替え、すぐそこに見えている頂上へ向け足を踏み出し、佐藤を先頭に十一時三十分、十三時三十分にかけてアタッカー全員が頂上に立つた。

これで当初の目標であつた「ハット・トリック」を達成。後は、このハット・トリックの頭に「ダブル」を付ける事だ。

GIIを終えたC隊は、十七日、十八日の二日間に分けて、B・ピークBCへ移動し、後藤、尾形が上部へ移動を開始、二十日にシエルパ一人を含めてC4を三時に出発。九時二十六分には頂上に立つてしまふ。

順応が遅れていた野沢井が復帰し、寺田とB隊の中島三人で二次アタックに出たが天候が悪化しBCへ引き返す。撤退した三名と、BCに残っていた綿貫、田島、シエルパの六人がいたが、野沢井、足を痛めてしまつた寺田では、フオロー出来ず、全ての登山を終了して、二十八日BCを撤収した。

B隊もようやく二十日にガツシヤールブルムBCへ移動を終え、二十二日G1への登山を開始しようとしたが朝からの雪でこの日の行動を中止。二十三日C1へ移動、二十四日、このまま一気にアタックを行うために必要最小限の装備食料を持つてC2へ上り、二十五日、ジャパニーズ・クロワールに入つて行つたが、小規模ではあつたが二、三回雪崩に襲われ、核心部を抜けた六九〇〇m付近で撤退してC1へ下降した。

この頃になると、七月に入つての連続した好天のためか、雪が腐り始め、日中ともなると雪崩がどこから出て来ても不思議でなくらい雪が緩み、クレバスも大きく広がる一方で、BCとC1間のアイスフォール帯のルート確保もおぼつ

かなくなってきた。これ以上の登山続行は危険と判断し、二十
六日全員がBCへ下降した。

しかし、七月に入って悪天にな
ったのは、四、十、二十二日の三
日間だけであつたが、B隊は悉く
この三日間に、アタック日、移動
日と絡んでしまった。

ダブル・ハット・トリックは成
らず。まして、二十人の隊員で一
人二座、延べ四十人の登頂者を作
り上げねばならなかつたのだが、
結果は延べ二十四人、二座共に上
れなかつたのが三人と、あまり良
い結果ではなかつた。

今回の最大の目的であつた、次

世代を担っていく若い力が台頭し
た。八〇〇〇mの頂に立つた自信
を是非次の遠征で見みたい。

群馬県カラコルム登山隊97 隊員構成

総隊長	星野 光
隊長（渉外）	名塚秀二
副隊長（戦略）	佐藤光由
副隊長（輸送・梱包）	後藤文明
隊員（戦略）	宮崎 勉
隊員（戦略）	尾形好雄
隊員（記録）	馬場保男
隊員（輸送・梱包）	吉田秀樹
隊員（会計）	吉田文江

隊員（装備）	梁瀬佐市
隊員（食料）	岩崎 栄
隊員（装備）	岩崎 洋
隊員（装備）	江塚進介
隊員（装備）	中島剛二
隊員（装備）	野沢井歩
隊員（装備）	星野龍史
隊員（食料）	品川幸彦
隊員（食料）	寺田 勉
隊員（記録）	綿貫 剛
隊員（記録）	福本誠志
医師	田島崇行
	高橋純一

登山実行委員会構成

委員長・総隊長	星野 光
顧問	中曽根弘文
副委員長	石井謙一郎、田中成幸、 富山真、悴田正也、八木原紈明、 高田政美、松永幸雄
委員	女屋等志、羽野順一、西山 年明、阿部源、町田幸男、中嶋登 良次、須田栄一、加藤恒夫
登山隊長	名塚秀二

三賞の栄誉に輝く

群馬県カラコルム登山隊一九九
七は、平成九年七月十六日、八〇
〇〇m峰三座の登頂を果たし、カ
ラコルム・ハットトリックを達成
したことをもって、群馬県、また、
群馬県体育協会、更に上毛新聞社
から次の表彰を受けた。

◆ 群馬県スポーツ賞

平成十年二月十日

◆ 群馬県体育協会スポーツ賞

桑原体育賞

平成十年二月二十日

◆ 上毛スポーツ賞

平成九年十二月十三日

写真展示会開催される

群馬県山岳連盟とスポーツニッ
ポン新聞東京本社の主催により、
カラコルム登山隊の記録写真展示
とビデオ上映が、前橋会場の十月

三十一日を皮切りに、太田会場の
十二月十四日の閉幕までの期間に、
左記五会場で開催され、各会場三
名の隊員による説明も行われた。
前橋西武百貨店、沼田サテイ、
高崎シティーギャラリー、桐生長
崎屋、太田市民会館

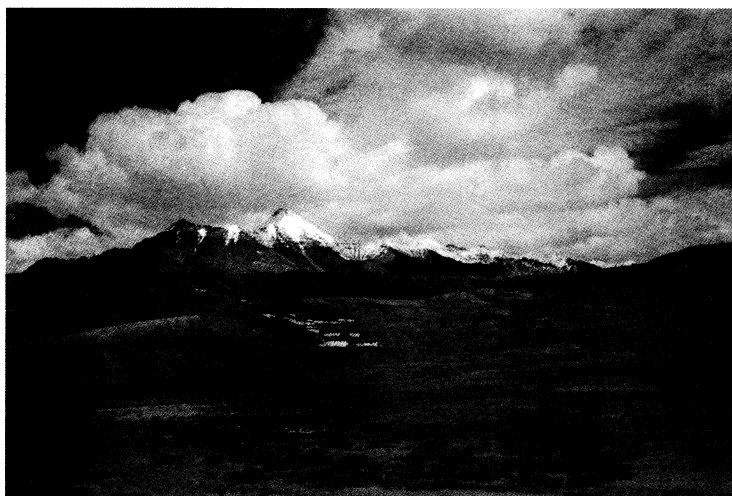
講演会開かる

群馬県生涯学習センターが主催
する「生涯学習講演会」の一環と
して、平成十年二月十四日、カラ
コルム登山隊名塚秀二隊長が「八
〇〇〇mに挑む」と題して講演を
行った。登山隊の目的設定、隊編
成をはじめ、出発から登頂に至る
行動の概要をスライドの投影に沿
って紹介するとともに、ヒマラヤ
登山に賭ける思いを熱く語って、
生涯学習センター多目的ホール満
席の聴衆を沸かせた。

チャウチャウカンニルダ登頂

高体連登山部海外登山報告

高体連登山専門部委員長 高橋 守男



チャウチャウカンニルダの全容

回で四回目を迎えました。

「三月の尾瀬から海外の山へ」は、高橋山岳部から地元の山岳会に入り岳連の海外登山で活躍している山岳部OB・OGが証明してくれていますが、私達顧問もこれを合言葉に、登山を続けてきました。

三年前から準備が始まった今回の登山では、十人の全隊員がチャウチャウカンニルダ(六三〇三m)山頂に立ち、当初の目的を達成することができました。これは、山岳連盟の皆様を始めとして多くの関係者の応援あればこそと、心より感謝申し上げます。以下遠征の概略を報告いたします。

隊の名称 群馬県高校教職員イン
ドヒマラヤ登山隊
登山山域 インド ヒマチャルプ
ラデツシュ州 スピティ地区 チ

ヤウチャウカンニルダ峰(六三〇三m)

登山期間 平成9年7月23日～8月20日

隊構成

隊長	高橋守男	洪女
副隊長	田中洋史	中之条
記録	岡 重雄	伊商
食糧	宮崎捷二	桐生
装備	関口哲生	桐生王
会計	蘭田武明	新田暁
輸送	横山寿雄	高崎工
記録	対比地昇	太田西女
食糧	長澤明裕	太田工
装備	新井伸栄	中央

行程(前半7月、後半8月)

23日	成田発(AI)
26日	ニューデリーからマナリへバス移動
28日	チョウタダラへバス移動
29日	カザへバス移動
30日	BC建設(五一〇〇m)
4日	ルート偵察
5日	ABC建設(五六〇〇m)
6日	上部ルート工作
7日	第一次アタック6人登頂
9日	二次隊ABCへ
10日	二次隊アタック7人登頂
13日	BC撤収。カザへ移動
15日	マナリへバス移動
16日	ニューデリーへバス移動
19日	ニューデリー発(AI)
20日	成田帰着

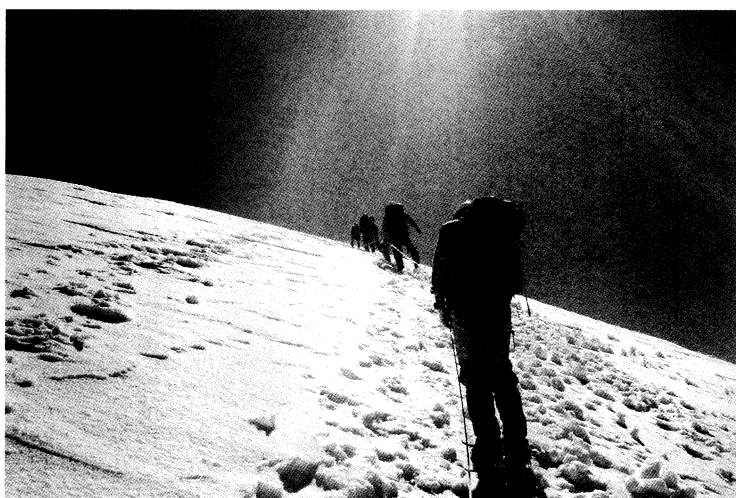
登山許可取得の難しさ

中国チベット国境に接するこのスピティ地区は、ごく最近まで外国人の入域が禁止されていました。そのため、外国人に解放された現在でも、外国人だけによる登山許可は、その取得が難しいことが予想されました。許可取得交渉中に、インドの登山規則が変わったり担当者の考え方が変わるなどとしてインドの示してくる条件が度々変わり、それに対応していくのは、なかなか大変です。また、許可連絡が遅いため、日本での準備を進めるか否か判断できなくなり、実施を1年延期せざるをえないなどの

困難がありました。

登山中のあれこれ

天候にもほぼ恵まれながら、夏の登山を無事終えられました。一番辛かったのは、ベースキャンプでの高度順化でした。途中の二つの峠を越えて多少なりとも高度順化ができているかと、バスを降りたカザ(三六八〇m)から1日でBC(五一〇〇m)に入ったのが原因でした。そこで、4人の隊員はカザへ下ってから登りなおすことで、全員が何とか頂上に立てた次第です。



フィックスをたどって (6000m付近)

八〇〇mのフィックスを張りましたが、20cm程の雪の下の斜面は水で、スノーバーがなかなか打ち込めないなか、ルートワークを1次隊の6人全員で行いました。チームワークを象徴するようなフィックスとなりました。デリー到着後の費用の精算では、現地エージェントとの間で最後の力を振り絞って火花を散らすものとなりました。

登山活動を終えて

辛かったこと、だから楽しかったこと。余韻にひたりながら登山のまとめをしていると、空つ風の季節になりました。そして、インドヒマラヤ登山中の緊張感と充実感そのあとの解放感が、日毎に懐かしさを増していきます。

高体連登山部の第1回目の海外遠征（シャルミリと命名）からはや十七年たち、今回が4回目となりましたが、この間事故無く参加者のほとんど全員が目的の山頂を踏み、その後も各高校の登山部顧問として活動しています。海外はもとより、このための国内訓練山

行での顧問の経験が、群馬の高校生への安全登山に多少なりとも寄与してきたかと思えます。また、これらの活動を通しての顧問の寝食を共にした経験は、顧問間のみならず、登山専門部の組織の連帯を生む活動の一つとなりました。

今回のことも、話題に上がってきますが、間もなく西暦二〇〇〇年。シャルミリからちょうど20年となります。この頃をめどにしながら第5回目の遠征が実施され、更に多くの顧問が新しい体験をし、これが高校生に還元され、一人でも多くの高校生が登山を通して成長してくれたらと願っています。

岳連報・遭難共済・日山協参与について

群馬県山岳連盟理事長 八木原 窓明

一九九八年になり、いよいよ二〇世紀も終りに近づいた、という感を強くしております。皆様には岳連活動に対しますご協力、ご支援に感謝申し上げます。

「群馬岳連報」が一九五七～五九年にわたり三号発行され、一九七四年（昭和四十九年）十月に「嶺呂」としてタイトル・内容を一新し、六十号が一九九七年（平成九年六月）に発行されておりましたが、この度「山岳ぐんま」と改称し、版形も文字も大きくして、読み易く、内容も新たに発行されることになりました。

ご期待いただくと同時に、玉稿もお寄せいただきましてより内容のある岳連報にして参りたいと存じます。ご協力の程お願い申し上げます。

日山協の遭難共済に加入を

登山者の遭難対策事業は私共山岳連盟も日山協も主要事業の一つであり、関係団体と協力して推進しておりますが、依然として遭難は後を絶たず、特に中高年者の遭難は急増しています。諸経費の高騰もあり、搜索救助費用の負担の

増加は山岳関係者にとつては大きな問題となっています。

山を登っている限りベテラン・初心者との別なく、またどんなところでもミスは起こす可能性がります。事故が起これば、同行者だけで始末し得ても、仲間や救助隊が出動した場合でも、費用の問題が起こつて参ります。その場合の当事者の負担を軽減あるいは全てを補償するのが「山岳遭難共済」制度です。

「共済」は「保険のようなもの」であつて「保険」ではありません。相互扶助の考え方から生まれた制度です。生命の代償としての保険金というものではありません。

掛け金が高くては加入者は増えません。逆に加入者が多ければ多い程掛け金が安くなるのが共済です。いわゆるスケール・メリットです。事故が無ければ還付も増えます。

日山協もこれまで共済を実施して来ましたが、思った程加入者が増えず苦慮して参りましたが、三井海上火災との度重なる協議の結果、少しずつ登山者に対してより有利な補償内容になつて参りました。

た。

世相も、人々の考え方も変わりつつあります。アメリカのような訴訟社会化傾向は益々強まりそうです。遭難が裁判所で争われ、リーダーや主催者の責任が問われる判例も増えていきます。そのために個人賠償責任共済金も設けられました。

山岳会のリーダーや、初心者を指導したり、登山教室・登山学校・山岳ガイド（職業として）などをする人達にはとても安心な共済になつて来ました。山岳連盟加盟の山岳会員であれば誰でも加入できます。また海外における山行中は「死亡・後遺障害事故」のみに担保されます。これも安心です。

この共済は全ての登山を対象にするのではなく、「所属山岳団体（山岳会）に登山計画書を提出」してあり、団体が承認したものに限り、ますのでご注意ください。つまり、登山時には山岳会へ計画書を出し、会長・代表の承認を得る、という当たり前のことをすれば良いだけのことです。詳しい条件については岳連事務局なり、私なりにお尋ねください。



第1次隊登頂

山岳遭難共済のしくみ

(1) 共済のあらまし

日本山岳協会を契約者とし、日本山岳協会傘下都道府県山岳連盟（協会）加入山岳団体の会員を被保険者とする遭難搜索救助費用付団体普通傷害保険とします。

提携損害保険会社は三井海上火災保険（株）とします。

(2) 加入資格

日本山岳協会傘下都道府県山岳連盟（協会）加入山岳団体の会員。

(3) 保険期間

4月1日より翌年4月1日までとします。

なお、やむを得ぬ場合、中途加入を認めます。この場合、終期は、翌年の4月1日となります。

(4) 共済の種類

① 一般共済（下表参照）

② スーパー共済（下表参照）

③ 特別共済

中高年ハイカー、高校山岳部向けに限定した共済で、行程中遭難した場合の搜索救助費用、死亡・後遺障害が補償されます。

◆掛金 年間 三、〇〇〇円

日山協参与について

現在群馬岳連からは六氏が参与になっておられますが、平成十年度からは日山協参与制度・賛助会員制度を値上げを含めて見直すべく検討中です。日山協参与の推薦

基準に関する規定では、年齢はおおむね五十歳以上で、日山協理事会が推薦した者を候補とする。各岳連の会長、副会長、理事長またはこれに準ずる役職を永年にわたって務めて多大な功績があった者、となっておりま

群馬岳連とし

ては副理事長、常任理事、理事等を永年務めて下さった方々や、それに準ずる方々を含めて会長名で日山協へ推薦したいと思いま

す。各山岳会部から多くの方々に三月末までにご推薦いただきたいと思います。

日山協参与会費は、年会費一万円と通信費二千円。

賛助会費は、誰でもなれます。年会費一万円。

山岳遭難共済 保険金額および保険料

	一 般 共 済				ス ー パ ー 共 済			
	A	B	C	D	A	B	C	D
死亡・後遺障害	150万	160万	150万	150万	200万	200万	200万	200万
入院保険金日額			2,000円	2,000円			2,000円	2,000円
通院保険金日額			1,000円	1,000円			1,000円	1,000円
遭難搜索費用	150万	150万	150万	150万	200万	200万	200万	200万
個人賠償責任		1億		1億		1億		1億
保 險 料	5,760円	6,420円	10,920円	11,580円	7,680円	8,340円	12,840円	13,500円

平成9年度登山教室報告

指導委員会副委員長 日向野克己

平成9年度の岳連主催登山教室が無事に終了した。今年も昨年に続いて100名を越す申し込みがあり、岳連の主催行事に対する期待感の高まりを感じさせられた。

田 正也、登坂 巖

昨年引き続きの、いわゆる「常連」も増えているが、全く新しいメンバーも相当数あり、この層は確実に広がっている。

9月28日 登山「赤城・鍋割山」

参加意識も相当に高く、熱心に受講し、すこしでも多くのものを吸収しようとする態度が目立った。

10月15日 講義「登山に役立つ気象の知識」講師・日向野 克己

1 開催期日・内容

10月19日 登山「稲含山」

今年度は、全日程を昨年より2日間増やして5日間とした。これは、昨年の反省に基づくもので、より多くの内容を伝達したいという考えからである。

実技登山は、全体を5班に編成、各班に指導員を2〜3名付けて、総合的な指導をするという方式をとり、これは昨年と同様である。この指導内容は、事前に指導員研修を行って相互理解を深める中で確認し合ったことを基本にした。内容は次の通りである。

1 開催期日・内容

① 歩行技術

② 地形図、コンパスの扱い方

③ 気象の知識

④ 登山の装備

⑤ 救急措置

⑥ 緊急時の対策

⑦ 山のマナー

⑧ 登山のためのトレーニング

期日は9月17日（水）から10月19日（日）に亘り、具体的な日割りは次の通りである。

2 講習生の参加状況について

9月17日 開講式及び講演「山の危険と安全」―谷川岳の遭難救助の体験から―講師・馬場 保男

9月24日 講義・読図「地図を片手に」講師・悴

参加申し込みは106名。実参加者は100名（男55、女45名）。このうち全5回の出席皆勤者は66名であった。

年齢は最年少13歳の中学生から



整体法実技講習

最高齢70歳まで広範囲に亘ったが、40、50歳代が圧倒的に多かった。いわゆる中高年者の登山人口が増えていることの現れとも言える。登山経験については、全くの初心者はなく、自己流にもせよ何らかの形で山に登っているという人が大部分である。そして、最近、世間で取り沙汰されている山での事故多発という傾向から、この辺りで登山の基本をしっかりと学んで置きたいという動機で参加したという場合がほとんどであった。また、すでに登山経験の比較的多い人は、技術を忘れないためには、反復練習が必要との認識で参加している者が多かった。

3 運営について

受講生募集については、新聞掲

載、運動具店での要項配付などで行い、名簿作成までの準備段階には約2ヶ月を要した。

期間中、特に登山実技指導には15人の指導員がこれにあたり、全体を5班に編成して、班ごとに行動しながら指導した。

実技登山は2回であったが、同一指導員が連続して出席するということがなかなか困難であり、また、事前の指導員研修会にも全員の参加が得られなかったことは、今後の反省事項になると思われる。

4 講習生からの視点

終了後の感想や要望などを総合すると、おおむね期待していた通りの成果が得られてよかった、という反応がほとんどで、今後の登山にも大いに役立つといった実用

的な成果を喜んでもらえたようである。また、意識の問題としても、安い費用で「献身的に」やってくれたという感想もあり、岳連主催という公的な意味合いも理解されたようであった。

今後の要望事項については、それぞれの立場や技術的な度合いから、さまざまな項目に分かれるが、もう一段階上の技術を学びたいという層も多くなっており、こうしたことを勘案して更に系統的、段階的、継続的なきめの細かい内容が用意される必要があると思われる。

5 今後の課題

2年連続して100名からの講習生を集めたこの登山教室であるが、この参加傾向はこれからも充分予想される。また、内容的にも、すでに積み上げができている中で、マンネリは許されないとところにきているとも思われる。3項でも触れたように、様々な要望に答えられるような、相当練り上げた内容が望まれるだろう。

講習会の指導内容を整えて指導課程を作り、マニュアル化し、それに基づいた指導員研修も必要で、すでに資格をもつだけになっっているような指導員層も発掘して、活動してもらう必要があるだろう。

現在、未組織の登山者は非常に多く、自己流の気ままな登山によ

る事故も多発しているのが現状である。登山は、本来自由なものであり、気の向くままに山に入るということもあつてよいのは勿論で、それをとにかく言う気持ちは毛頭ないが、山に入ることは冒険であることは事実で、どのような山であつても何らかの危険が付きまとうことを否定することはできない。

そので、最低限の登山基本技術だけは身につけて入山してもらいたいというのが我々の願いでもある。また、こうした認識も徐々に浸透しつつあるからこそ、これだけの講習生が集まるのであろう。

岳連の登山教室に対する期待感

は、いま非常に高まっている。岳連の活動が、海外遠征などの先鋭的な登山だけではないという大方の見方が、ようやく顕現化している今、岳連の全部門と平行して、指導部も総合的な活動の一端を担わなければならない。



稲含山山頂にて

第八回山田昇記念杯登山競争大会報告

総務部 千明政彦

平成九年十月五日(日)、第八回山田昇記念杯登山競争大会が開催された。過去最高の参加者数となり、受付会場は朝早くから大勢の選手で賑わっていた。山田杯は一三八名(参加申込み数一五五名、欠場者十七名)、三枝賞には九二名(参加申込み数一〇四名、欠場者十二名)、一般参加は二〇一名、役員一五二名の総勢五八三名の大会となった。

予定通りに七時から開会式、そして山田杯が八時三〇分、三枝賞が八時四〇分にそれぞれスタート

した。六連覇を目指した山田豊選手はタイムが延びず四位でのゴールとなった。その山田選手の連覇を阻止したのは、鍋木毅選手(群馬県庁)でタイムは二時間十一分一秒であつた。女子では田村とみ江選手が四年連続でトップとなった。三枝賞では新潟県十日町高校の上位独占となり、優勝した桑原和幸選手は二時間二十六分五十三秒のコースレコードであつた。

キャンプ場(ゴール)では恒例の豚汁、マスの塩焼き、おでん、焼肉、りんご、ビール、ジュース



山田杯スタート



力走する山田豊選手



鍋木毅選手のゴール



山田杯 左から2位佐藤、1位鍋木、3位田崎各選手



三枝賞 左から2位江村、1位桑原和、3位桑原大各選手

が用意され、すべて無料で提供されて参加者も大いに満足していた。午後三時には閉会式が挙行され、上位入賞者が表彰され、とび賞等の抽選もあり、黄色い声が飛び交うなか、それぞれの賞品が手渡しされ、今大会も無事に終了した。

●山田杯 順位表●

順位	氏 名	性別	年齢	所 属	時 間
1	鏑木 毅	男	28	群 馬 県 庁	2時間11分01秒
2	佐藤 昭則	男	28	十 日 町 消 防 署	2時間15分08秒
3	田崎 幸治	男	40	栃 木 県 山 岳 連 盟	2時間20分28秒
4	山田 豊	男	50	沼 田 山 岳 会	2時間20分29秒
5	百村 亨	男	38		2時間24分49秒
6	石原 輝雄	男	44	玉 村 ク ラ ブ	2時間25分58秒
7	田村とみ江	女	35	オルゴール館椎坂	2時間27分09秒
8	下嶋 浩	男	52	田 園 ク ラ ブ	2時間38分13秒
9	林 幸男	男	23		2時間40分18秒
10	松本 博明	男	41	玉 村 ク ラ ブ	2時間43分46秒
11	富岡 征雄	男	52	丹 沢 山 岳 会	2時間47分31秒
12	春日 乙英	男	42	(株) 高橋工務店	2時間48分33秒
13	星野 龍史	男	29	群馬ミヤマ山岳会	2時間51分01秒
14	大山 洋次	男	39	境 町 山 の 会	2時間51分04秒
15	デニス・オ・コーネル	男	29		2時間51分50秒
16	阿部 悦子	女	44	大 間 々 山 岳 会	2時間53分41秒
17	下坂 昌幸	男	24	F. A. C	2時間55分33秒
18	小林きく代	女	35		2時間56分07秒
19	女屋寿美子	女	44		2時間57分25秒
20	吉崎 實	男	51	足 利 走 友 会	2時間58分38秒
21	佐藤 邦夫	男	29	若葉グリーンメイト	3時間02分19秒
22	長谷川喜久男	男	40	高 崎 工 業 高 校	3時間03分27秒
23	田中 弘	男	32	群馬むすびの会	3時間03分49秒
24	法領田 恵	女	37	コアラ山の会	3時間03分58秒
25	石井 和徳	男	35	公立藤岡総合病院	3時間05分02秒
26	阿部 源	男	44	大 間 々 山 岳 会	3時間07分08秒
27	森 雅良	男	50	足 利 走 友 会	3時間07分20秒
28	関谷 拓郎	男	32	陸上自衛隊幹部学校	3時間08分13秒
29	中澤 安信	男	54	伊 勢 崎 山 岳 会	3時間08分56秒
30	井上 寿夫	男	49		3時間10分21秒

●三枝賞 順位表●

順位	氏 名	性別	年齢	所 属	時 間
1	桑原 和幸	男	17	新潟県立十日町高校	2時間26分53秒
2	江村 浩一	男		新潟県立十日町高校	2時間42分20秒
3	桑原 大輔	男	15	新潟県立十日町高校	2時間45分38秒
4	太田 智子	女	17	新潟県立十日町高校	2時間53分35秒
5	小川 怜	男	18	新潟県立十日町高校	2時間54分36秒
6	徳永 郁美	女	17	新潟県立十日町高校	2時間57分14秒
7	原田 義明	男	17	県立高崎工業高校	2時間57分25秒
8	星野 裕樹	男	16	新潟県立十日町高校	2時間57分35秒
9	丸山 剛	男	17	新潟県立十日町高校	3時間15分17秒
10	金子ひとみ	女	16	県立渋川女子高校	3時間18分10秒
11	内山 慶康	男	16	神奈川県立伊志田高校	3時間19分20秒
12	橋本美峰子	女	15	県 立 中 央 高 校	3時間28分17秒
13	古谷 吉久	男	17	県立安中実業高校	3時間28分33秒
14	増田 晃則	男	17	県 立 中 央 高 校	3時間29分43秒
15	渡辺 幸一	男	15	県立安中実業高校	3時間38分15秒
16	塩野 健	男	15	新潟県立十日町高校	3時間39分05秒
17	酒井 治	男	17	新 島 学 園 高 校	3時間39分33秒
18	本多 英明	男	18	高崎経済大学付属高校	3時間43分16秒
19	田村 智子	女	16	県立渋川女子高校	3時間43分17秒
20	浜田 純子	女	16	神奈川県立川和高校	3時間43分47秒
21	松本 建	男	16	県立高崎工業高校	3時間44分42秒
22	山田 明宏	男	15	県 立 中 之 条 高 校	3時間47分16秒
23	高橋 純	男	16	県 立 中 央 高 校	3時間48分23秒
24	飯塚 哲也	男	17	新 島 学 園 高 校	3時間50分24秒
25	小竹 亮	男	16	高崎経済大学付属高校	3時間51分32秒
26	馬場 隆	男	17	県立安中実業高校	3時間52分48秒
27	石坂 賢子	女	16	県立渋川女子高校	3時間53分02秒
28	尾見 薫	女	15	新潟県立十日町高校	3時間56分42秒
29	町田 裕樹	男	16	県立高崎工業高校	3時間57分45秒
30	斎藤 克哉	男	15	県立伊勢崎東高校	3時間57分52秒

第二十一回県民登山大会報告

総 務 部

期日 平成九年十月二十六日(日)
会場 吾妻郡六合村野反湖周辺
担当 群馬むすびの会・中之条山の会

前日からの寒波により、会場の冷え込みは相当であったが、風はなく好条件の登山日となり、午前七時三十分より開会式が行われた。

今大会は一般参加一〇〇名、役員六〇名の総勢一六〇名の大会となった。



野反湖畔の開会式

各コースとも八時には出発し、順調なタイムでの登山となった。

昼頃から風が強く、みぞれまじりの天候にはなつたものの、A・B各コースともに一般向けコースのため午後一時三〇分にはキャンプ場に到着し、温かいなめこ汁を口にしていた。

午後二時には閉会式が行われ、登山大会を終了した。また今回は六合村の好意により村営入浴施設の無料入浴券を配布され、疲れを

いやして帰路へとついた。

〇Aコース

(距離 約八・二km、五時間十五分)
野反湖ロッジ(キャンプ場)――

三壁山――カモシカ平分岐(カモシカ平往復)――高沢山――エビ山――野反湖ロッジ(キャンプ場)

〇Bコース

(距離 約一〇・二km、五時間三十分)
野反湖ロッジ(キャンプ場)――

八間山――野反峠――弁天山

――野反湖ロッジ(キャンプ場)

《千明政彦 記》



大会コースの説明

日山協自然保護委員総会報告

自然保護部

期日 平成九年十月十八日、十九日

会場 青森県下北郡湯野川温泉・下北半島山城

参加者 総勢七十八名(群馬県四名)

第一日目：自然保護総会

主催者・管理者の挨拶、来賓の祝辞、議長選出と続き、議題に入り、各山岳連盟(協会)から次の事項について提案が行われた。

◆講演「白神山地世界遺産地域の核心地域への入山の取扱いについて」根深誠氏(青森県岳連)

◆講演「青い靄(BLU E HAZE)下北半島」フィトンチッドのヒバ林の緑の効用について」浜石基睦氏(むつ山岳会)

◆「登山者とトイレ問題について」日山協自然保護委・高橋早苗氏(都岳連委員)

今年も昨年に引き続いて登山者のトイレ問題をとりあげ、特に未組織登山者や個人山行者の啓発など、どうしたら良いか勉強したい。また、山のリサイクル(ゴミ持ち帰り)問題、登山者と水の汚染問題、車の乗り入れ問題、動植物の保護等々、地域等に多少の差異は

はあるが活動の効果が表れてきている。

近年、入山者の増加に比例して山の糞尿汚染化が問題になつてきている。近い将来には、ゴミの持ち帰り同様に「ウンチの持ち帰り」運動の時代が来る。昨年発表された携帯トイレ・処理用具など、今年には更に研究改良された「クインバック」なる処理持ち帰りトイレが披露された。個々にはまだまだ問題点はあるものの、今はかわるメーカーがこぞって研究・改良開発をすすめている。

第二日目：現地視察「縫道石山の『オオウラヒダイイワタケ』の保護問題について」下北半島の西海岸に位置する縫道石山(六二六m)は岩質硬く薄刃のハーケンがガツチリ効く岩場であるが、オオウラヒダイイワタケのわが国唯一の生育地。登山ルートの見直しなど、自然保護の観点から現状と問題点の考察が行われた。

その他平成九年度環境月間都道府県山岳連盟活動状況報告が、群馬岳連ほか十二都府県により行われて、閉会した。

《中嶋登良次 記》

平成9年度

冬山合宿報告

遭難対策部

冬山合宿検討会は十二月十五日、八木原園明理事長、松永幸雄副理事長の出席のもとに開催された。協議のなかで、(1)朝夕とも六時から十分間、定時交信を実施すること。(2)新井邦光救助隊長宅への下山報告を厳守すること。の2点を申し合わせ事項とした。

今季冬山合宿の実施報告会は、平成十年一月十九日に開かれ、次の事項について申合せを行なった。(1)定められた報告用紙を使用すること。(2)出来るだけチーフリーダーが出席して報告し説明すること。(3)冬山合宿検討会には必ず参加すること。の3点である。

各会の合宿報告の概要は次の通りである。

一、剣岳方面

○境町山の会 九名 一九五〇m地点で中止

○太田山岳会 三名 計画中止

○ミヤマ山岳会 三名 マッチ箱手前まで 中止

○登高会 三名 マッチ箱手前まで 中止

○前橋山岳会 三名 北鎌尾根

○槍ヶ岳 大喰岳西尾根

○二月二十五日 国体委員会 国体予選 (縦走)

○四月二十五(土)・二十六日(日)(案) 国体予選 (縦走)

○二月二十五日 国体委員会 国体予選 (縦走)

○四月二十五(土)・二十六日(日)(案) 国体予選 (縦走)

新穂高温泉

○太田山岳会 七名 新穂高温泉

○中崎尾根 槍ヶ岳往復

○桐生山岳会 二名 硫黄尾根

○硫黄岳 赤岳 西鎌尾根

○中崎尾根 新穂高温泉

○前橋山岳会 三名 穂高滝谷

中止

三、甲斐駒・仙丈方面

○信越化学 四名 黒戸尾根

○駒ヶ岳 北沢峠 仙丈ヶ岳 戸台

○沼田山岳会 三名 戸台

北沢峠 仙水 駒ヶ岳往復

四、八ヶ岳方面

○太田山岳会 二名 赤岳鉾泉

○硫黄岳 横岳 赤岳

○権現小屋 青年小屋 西岳

○広河原

五、八海山

○大間々山岳会 三名 新開道

登山口 主稜線直下まで 中止

六、谷川岳

○沼田山岳会 六名 天神尾根 頂上往復

《加藤藤夫 記》

《加藤藤夫 記》

国体委員会報告

国体部

○二月二十五日 国体委員会 国体予選 (縦走)

○四月二十五(土)・二十六日(日)(案) 国体予選 (縦走)

○二月二十五日 国体委員会 国体予選 (縦走)

○四月二十五(土)・二十六日(日)(案) 国体予選 (縦走)

○二月二十五日 国体委員会 国体予選 (縦走)

雨乞山 (踏査) 小野子山 (宿舎) 北毛青年の家

○七月二十四(金) 二十六日(日) 関東ブロック予選 (栃木)

○選手・監督の選出について

・成年女子選手：法領田、女屋、小林3氏

・成年女子監督：山田豊氏に要請

・成年男子選手：若手選手の発掘をめざす

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

《町田幸男 記》

で次年度のカレンダー作品の応募を締め切り、九月には新しいカレンダーを仕上げて、各会への販売をお願いするというのが例年のパターンでありまして、後半は集金・決算の対策で年を越してしまい、長いカレンダー事業になっていま

す。

今後、事業部としての役割が多

くあるかと思いますが、それな

りの努力もしていく所存ですので、今後共益々のご支援とご協力をお願い致します。

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

《長谷川勇 記》

ご協力をお願い申し上げます。(問合せ先) 〒371-0057 前橋市竜蔵寺町275-5 八木原園明(日山協国際部長、群馬県山岳連盟理事長。TEL・FAX 027-233-2683)

『99岳連カレンダー』作品の募集について

◆題材 群馬県の山

◆フィルム リバーサルおよびモノクロフィルムに限ります。

◆締切り 平成十年六月末日

◆送り先 須田栄一(〒371-0581 前橋市総社町植野225-22)

山麓逍遙

(編集後記)

ここに岳連報『山岳ぐんま』第一号をお届けします。これまでの岳連報『嶺呂』を第六〇号発行を節目として終刊、体裁を一新しました。一面の図案は、星野龍史君が郷土の自然と人の山岳重畳・気骨稜稜といった感じをデザイン化したものです。

自然のより困難な状況に向かつて挑み続けるアルピニズムの展開が生き生きと語られ、あるいは遭難防止や自然保護など登山環境の整備について具体的に報告されるといった、更なる内容の充実を期待してやみません。ご支援をお願いします。(岡安茂能 記)

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記

岡安茂能 記